

# オールドキャッスルの乱について

——ロラード運動の再考察——

松 浦 道 一

【要約】まず、シエクスピアの『ヘンリー四世』に登場することでよく知られている Sir John Oldcastle の波瀾にみちた生活ができるだけ忠実にたどり、何故に彼が叛乱を起したかを解明する。いわゆる「オールドキャッスルの乱」は、彼のもつ個人的魅力・異分子の冒険的参加、「神の共和国」実現を期すユートピア思想・その企図の伝達組織などにおいて複雑な姿を示すが、基本的にはなお異端的宗教運動であった。にもかかわらず、それは外国僧院没収にみるような世俗的 Anticlericalism の抬頭を背景に、ボヘミアのフシーテン運動に刺戟され、現状打破を求める騎士・地主・商人・職人とくに織工などを包含し、政治的叛乱の様相を帯びざるをえなかった。ここにロラード運動が叛乱的性格をもつものであるという印象が刻印され、もはや有力者の支持はえられず、この運動はかえって弱体化し、「地下運動」時代に入るのである。そしてここにもウイクリフ以来の教義的改革への道は、はやくも閉ざされた所以であるといえよう。

## は し が き

Sir John Oldcastle の名は、宗教改革期からイギリス国内では人口に膾炙し、いわば国民的英雄として伝えられ、シエクスピアもその史劇の一作『ヘンリー四世』において

かれを登場させている。① またその後もウイクリフ・フス・ラティマーらとともに宗教改革に不可欠の人物としてあげられ、② さらにワット・タイラー、ジャック・ケードらとも民衆の指導者として示されている。③ テニソンもそのバラッドのなかでかれを登場させ、その不幸・不運を独白さ

せている。<sup>①</sup>かれはしかく重要な人物であったのか、かれの指揮したロラードの徒の叛乱は、どのような意味をもつものであったのか。小稿はいわゆるオールドキャッスルの乱を分析して、ロラード運動の性格に言及し、そのイギリス宗教改革前史における史的意義についていささか考察したものである。

① シェクスピアは、はじめその『ヘンリー四世』において Oldcastle の名で登場させたのであるが、後に新教徒の抗議に<sup>②</sup>対し、Falstaff に変更してゐる。このことは、この史劇のヘンリーが “for Oldcastle died a martyr, and this is not the man” と<sup>③</sup>うと<sup>④</sup>わ<sup>⑤</sup>ひ<sup>⑥</sup>て<sup>⑦</sup>う<sup>⑧</sup>ら<sup>⑨</sup>う<sup>⑩</sup>と<sup>⑪</sup>か<sup>⑫</sup>ら<sup>⑬</sup>も<sup>⑭</sup>明<sup>⑮</sup>ら<sup>⑯</sup>か<sup>⑰</sup>る<sup>⑱</sup>。もちろんシェクスピアがこの戯曲のなかに登場させた Oldcastle は、臆病者のいばり散らす道化者であり、それは創作された人格ではあるが、少くとも皇太子ヘンリーの悪行時代の盟友であり、やがてヘンリーの即位後処刑されるといふ点では、現実の Oldcastle の生涯からヒントをとつてゐることは争われない事実である。(J. Gairdner; Lollardy and the Reformation in England vol. 1, 1908, p. 205.)

② W. Gilpin; Lives of the Reformers 1765 cit., W. T. Waugh; “Sir John Oldcastle” in E. H. R. 1905 July, p. 434.

③ C. E. Maurice; Lives of English popular Leaders 1872.

cit., Waugh; ibid.

④ Tennyson; Ballad and Poems p. 112. cit., Waugh; ibid. p. 435.

—

Sir John Oldcastle (1376?~1417) はヒアファド州の極西を流れる Wye 河に沿う Weobley 付近 Almeley<sup>①</sup>の領主の家に恐らくは一二七六年ごろに生れたらしい。Almeley の付近には Oldcastle という名の小高い丘があり、恐らくはローマ時代の要塞のあとであつたろう。そこでこの地方の古くからの家がらとして Oldcastle の名がつけられたらしい。<sup>②</sup>Oldcastle の家は大祖父 Peter の時から有力となり、John という名のかれの祖父の時代には、一三六八年と一三七二年の二回議會に出席し、また叔父の Thomas も一三九〇・一三九三年に出席し、<sup>③</sup>さらに一三八六・一三九一年の二回ヒアファド州のシェリフになつてゐる。またかれの父 Richard は騎士に列してゐる。<sup>④</sup>恐らくかれも一四〇〇年ごろ騎士に列し、同年秋に Codner の Grey 卿の部下としてヘンリー四世のスコットランド征討に従軍し、

その間国王の使者として活動して認められ、爾来十年一日のごとく皇太子につきまわったのである。翌年には Owen Glendower の叛乱で悩まされた Welsh Marches の作戦に従軍し、その功によつて Buith 城の城主となり、まもなく Carmarthen の Kidwelly の城主として四〇人の槍騎兵と二二〇名の射手を部下にしている。一四〇三年九月には叛徒を処断する権限を与えられ、翌年には Almeidy の南西八哩にある Hay 城の城主をも兼ねている。一四〇四年一〇月には Welsh Marches 地方の叛徒の軍需輸送ルートをおさえ、一四〇八年には Glendower に対する征討軍の指揮をとり、同年四月十二日の和議の推進者として活動している。皇太子とかれとの個人的友情は恐らくこれらの作戦従軍中に不拔のものとなつたのであり、かれの功績とともにそれはいよいよ深い信頼をえ、一四〇六年四月以降四〇マークの年金を与えられている。さらに軍事的な方面ばかりでなく、この間一四〇六年にはヒアファド州の治安判事さらにシェリフにもなつている。

このようなかれにとつて一四〇八年は正しくその生涯の一転機であつた。この年の六月、かれは第三の妻として

Joan Cobham と結婚し、この結婚によつて有名なケンツの貴族の領地・財産すなわち、一二のマナーと堅城 Coaling 城、さらにロンドンの別荘 Cobham Inn をえたのである。そして、一四〇九年一〇月二六日、かれはバロンとして上院に召集されている。ウォルシンガムによれば、かれはこの議會で教会財産の没収を請願し、これによつて十五人の伯と一五〇〇人の騎士と六二〇〇人の郷紳の給付および一〇〇の施療院の建設をなすべきであるという具体的な提案を行なつたという。後世の年代記者や歴史家はこれをそのまま受けつけ、Wylie のごときは Oldcastle をこの提案の張本人としている。しかしながら、これは事實ではないであらう。ただこの議會においては anti-clericalism が強く、聖職者にして世俗職を兼ねた者（いわゆる "ecclesiastical clergy"）は、コモン・ローで審理されるべきであることが認められている。ウォルシンガムのいうような提案こそ記録されていないが、偽りの口実でえられた不在聖職者の職禄は、国王の手に返還されるべきであるという請願は記録されている。

Oldcastle がロラードの徒であつたことは、次のような

背景から理解できよう。すでに一三九〇年代までに熱烈な  
 ロラードの徒であった William Swinderby や Walter  
 Brute がマンマド州で活動して来た<sup>⑧</sup>、Oldcastle も  
 の影響をうけたことであろう。とくに Richard Wyche  
 はもとヒッファド州の教区牧師であり、Oldcastle とも親  
 しかつた。Tait 教授が言うように、ヒッファド州とくに  
 Almeley 地方は「ロラードの温床」であつたのである<sup>⑨</sup>。一  
 般に西部のナイト層には改革を望む傾向があり、Almeley  
 から余り離れていない Cusop 城の Sir John Clanvowe  
 もロラード派のバトロンであり、西部の地主 Grendor 家  
 もそうであつた<sup>⑩</sup>。Oldcastle 自身がロラードの徒であつた  
 という最も古い証拠は、一四一〇年に明らかとなつた。す  
 なわち、一四一〇年四月三日付の手紙で大司教 Arundel は、  
 Rochester の副司教に Sir John Oldcastle と一緒に住ん  
 でゐるジョンという牧師が Hoo Halstow および Cooling  
 の教会でロラード教説を説教していると述べ、この地方を  
 破門 (インターディクト) 下においている。ところが、偶然  
 にも Sir John の義娘 Joan Braybrooke がソマセット  
 州のナイト Sir Thomas Broke の子息と結婚式をあげる

ことになつたので、まもなくインターディクトを解いてい  
 る<sup>⑪</sup>。その年の9月8日付で Oldcastle が Cooling 城から  
 ホッミアのフスの徒の指導者 Wok Waldstein にあてた  
 手紙が発見された。それはフスの徒の最近の成功を祝する  
 ものであり、最後まで戦うように激励したものである<sup>⑫</sup>。さ  
 らにその後 (恐らく一年後) の9月7日付の手紙からは、両  
 者間の通信が保たれ、フス自身が Oldcastle に手紙を送つ  
 ていることがわかる。このことは、Oldcastle がいわば当  
 時のロラードの徒の代表者として認められていることを示  
 すものである。

しかも、Oldcastle は依然として皇太子とともに活動し  
 ているのであり、一四一一年秋にはブルグンド公を救い、  
 パリを回復する戦に一方の司令官として従軍し、武勲をあ  
 げている。それゆえ皇太子が一四一三年三月二十一日國王  
 ヘンリー五世として即位したとき、Oldcastle は大いに優  
 遇され昇進するであろうことが期待されたのであつた。し  
 かしながら、ランカスター政権は少なからず教会の支持に  
 よつていたので、即位したヘンリー五世は教会と結びつき、  
 いち早く聖職者会議を開いてロラードの徒の弾圧に努力す

るのである。こうして早くも一四一三年の会議では異端のけんぎのあつた John Lay という牧師が取調べられ、その結果かれはノッティンガム州から来てロンドンにおいて Cobham 卿の前でみさを行ったことがわかつたのである。

その後も追求によつて多くのロラード派の論文が発見され、焼却されたが、その間ロンドンの Pasternoster Row の古本屋で一冊のパンフレットが発見された。ここにおいてこの店の主人は逮捕され、それは Oldcastle 所有のものであると自白した。<sup>⑤</sup> これは国王の手許に提出され、国王は Oldcastle を呼び出して詰問したが、Oldcastle はこの本はわずかに二葉しか読んでいないと答えたという。しかしながら、これは実に動かしえない証拠であり、Arundel は慎重を期して国王に相談したが、国王は Oldcastle との深い友情を考へてかれを救うべくあらゆる努力を惜しまなかつた。<sup>⑥</sup> それにもかかわらず、Oldcastle の転向は遂に期待できなかつたのである。さすがの国王も「かれは悪魔にとりつかれている」といつてあきらめ、八月十五日ごろかれの処置を聖職者会議に委ね、一方 Oldcastle は Cooling 城に閉じこもつたままであつた。<sup>⑦</sup> 大司教はこの間にしばしば

召喚状を発したが、それは拒絶されたので、遂にかれを破門し、九月二三日までに反対意見があれば陳述するように伝えた。Oldcastle は国王のもとに出頭し、「クリストこそ教会の唯一の長であり、地上における身分は僧侶、騎士、庶民にわかれており、それぞれ別個の権能をもつものである。いかなる高僧といえども服従を要求することは公然たる反クリストになる」旨を述べ、さらに国王に対し、「私のごときは、最も公平にして学識ある人によつて裁かるべきである」と訴え、「国王の面前で一〇〇人の騎士と郷紳ナイト・エスクワイアが私の無罪を証するであろう」と迫つた。<sup>⑧</sup> 国王はかれをその私室に招いたが、このとき Oldcastle はすでに法王に訴願したと言明し、国王にその写しを見せた。<sup>⑨</sup> 国王は不快を感じたが、かれの旧友をあつく遇し、ロンドン塔内に護送を命じ、大司教の審問に委ねたのであつた。<sup>⑩</sup> こうして九月二十三日 Oldcastle は大司教の前に出頭し、自分の信念を表明する準備ができたといひ、あらかじめ用意していた文書を大司教に手渡した。英語でかかれたその懺悔文には、サクラメント・懺悔・巡礼などについての見解が示されている。<sup>⑪</sup> その要旨は次のごとくである。祭壇のサクラメント

はパンの形をしたクリストの肉体であること、人は真実の告白をもつて懺悔をしなければ救済されないこと、偶像是クリスト・聖徒・殉教者の情熱を示すものなること、巡礼は地獄への道であり、神の命を知りこれに従えば救済されることなどが述べられている。<sup>⑤</sup>

Arundel は異端の審問には経験がふかく、教会側とロード派の見解は決定的に異なっていると考え、単なる議論には期待できぬことを見越していたらしい。問題はこのような言い逃れではなく、パンがそのままであるかないか、僧侶への懺悔は必要であるかないかにかかっていた。ところが、Oldcastle はこれ以上の論議を拒否し、聖職会が決定したことには従う意志はあるが、教皇・枢機卿・大司教・司教その他の高僧たちがこのようなことを決定する力をもつとは思わないと答えた。<sup>⑥</sup>そこで問題点に対する教説を英語で書きて Oldcastle に手交し、今一度月曜日に答弁するように命じた。九月二十五日(月)法廷はブラックフライアズに移され、多数の高僧・名士の出席のもとに開会された。Oldcastle は神以外の何人からも赦免を求めないと前提し、現存の教会や僧侶の腐敗・墮落を酷評し、次のように言明

した。「もし教会がサクラメント後のパンはもはやパンでないこと決定したのなら、それは教会に財産の毒がまわってからのことであろう。僧侶への懺悔は必要であるとは思えない。教皇は反クリストの頭目であり、高僧たちはそのメンバーであり、托鉢僧はその尻尾であると論難し、しかもかれのみが真のペテロの後継者である」と主張した。<sup>⑦</sup>もはや考慮の余地はない。Arundel はこのことを遂に Oldcastle を異端と宣告し、かれを破門して世俗司直の手に委ねたのである。

しかし、Oldcastle はなお国王の好意をうけ、転向するかも知れないという希望のもとに塔のなかに四〇日間閉じ込められることになった。かれは牢内では一定の自由を認められ、外部との連絡もできた<sup>⑧</sup>と推定される。ロードの徒は国王の友人である Oldcastle すら投獄されたのだから、かれらを待っている運命を予想して絶望的となり、一〇万人を動員して Cobham のもとに立ち上る用意があると声明した。ここにおいて、政府側も Oldcastle によつてなされるはずの誓絶文書を公表してこれに応じた。<sup>⑨</sup>

Oldcastle は十一月に開かれる予定の聖職者会議の判決

に服することを約して、塔から逃亡する機会をとらえたといわれるが、かれの逃亡については確実なことはわからぬ。ロンドンの Smithfield の羊皮紙製造業者 William Fisher という者が、Oldcastle の逃亡を助けたかどで一四一六年一〇月四日に絞首刑になっているが、かれの告白によれば一四一三年一〇月一九日に同志とともにひそかに塔にいたり、牢内に押し入って Oldcastle を連れ出し、火曜日まで休養させ、一緒に St. Giles Field の集会に参加したとある。そのほかに守衛が賄賂を贈られていたとか、多くのかれの友人たちが協力して逃亡させたとかという説もある。<sup>⑤</sup>

国王は数日間追及すれば、Oldcastle を再逮捕できると考えて、この逃亡事件をもみ消そうとしたが、それは望みなく、遂に公表のやむなきに至った。<sup>⑥</sup>この間、議会は十二月一日からロラード派の一拠点レスターで開かれた。思うに、これは現下の状勢を知らないという印象をロラード派に与えて油断をさせるためであったと思われる節がある。スパイも放たれた。そのなかの一人 Thomas Burton はその働きを認められ、その報酬として 5 万をえている。<sup>⑦</sup>国王

は多数の高僧・貴族らとともに、ケント州の Eatham でクリスマスを過ぎていたが、自分が危険に直面していることは全く知らなかったらしい。Oldcastle はこの間にメッセージを廻して Eatham にいる国王を捕える計画を企てていたのである。<sup>⑧</sup>たまたまロンドン市長 William Crompton がロラードの容疑者を逮捕し、その取調べの結果、この陰謀が明らかになったのである。市長は一月五日(土)有力な兵士の一隊をさし向けて John Burgite の仕事場を襲い、一味七名を逮捕した。かれらは選り抜きの一団で役者に仮装して Eatham 城中に入り、国王を捕える計画をめぐらしていたのであった。<sup>⑨</sup>そしてかれらの自由によって Oldcastle の陰謀が露見したわけである。それによれば、一月九日夜から一〇日の暁方にかけてロラードの徒が各地から St. Giles Field に集合する手筈になっていた。ここにおいて、国王は一月八日ひそかにロンドンに向い、市中に入らないで、Westminster の一角にとどまり策略を練った。そして一月九日夕いち早くロンドンの門を閉ざし、ロンドン市民の St. Giles Field への参加を不可能にする<sup>⑩</sup>とともに、主力を Westminster と St. Giles Field の間

に配置した。そこへ続々と各地からの集団が到着したが、暗闘のなかでかれらは王軍を同志軍と間違え、多くの者が逮捕され、抵抗した者は殺害された。Oldcastle の直接指揮した一団は、ロンドン市からの応援が不可能なのをみるや退却をはじめ、すでに集合しつづつあった者もこれに従った。王軍は追撃にうつり、叛乱軍は一掃された。すでに一週間も前から遠隔の地方から St. Giles Field への途上にあつた人々は、この知らせを聞いて引き返したが、なかには公道を警備する王軍によって撃破された者もいた。戦闘はほんのわずかしが行われず、日の出前に叛乱は実質的についで、時を移さず捕虜たちに対する訊問が始まったが、Oldcastle は遂に発見できなかった<sup>④</sup>。けだし、大胆にみえるけれども、人口の多いロンドン市にかくれる方が Oldcastle にとつては最も安全であり、国王側もこれを察知してかれが安全なところへ逃れる前に逮捕しようと思ひだからであらう。Oldcastle についての情報を提供した者には五〇〇マーク・逮捕した者には一〇〇〇マーク・逮捕した市町村には国王治世中の免税が約束された。それにもかかわらず、Oldcastle はその後四カ年間も逮捕されなかつたのである。

その間一方では調査追求委員会が任命され、国王の殺害と王国の破壊を図つた叛乱の意図や叛逆者の調査が行なわれた。その結果、大部分はミッドランド地方と西部地方の諸州であり、Kent・Sussex・Hampshire は除かれ、Nottingham 州および Derby 州以北は調査の対象とならなかつた。後にロード運動の温床となつた Norfolk 州があげられていないことは注目に価する。一二日(金)には六九人が、一三日(土)には三八人が、一六日にはさらに数人が、次の金曜日には四人が処刑された。叛逆者は絞首刑に、異端者は焚刑に処せられた。そのなかにはヒアファド州の郷紳<sup>ユナイテッド</sup>であつた John Brown・活動的であつた John Beverley・有力なナイト Sir Roger Acton・Dunstable の富裕な醸造業者 William Morley もつた<sup>⑤</sup>。しかし一月二三日以降処分は寛大となり、処刑者はなくなつた。ロンドンの洗い張り屋 William Dene・塔の守衛 Roger Cheyne・サマセット州の William Beauchamp・Oldcastle の義娘の夫 Thomas Broke などの関係者・家族員も投獄されていたが、間もなく釈放された。保釈をえることも容易であつた。こうして国王の寛大な処置は速かに効果をあ

らわし、王国の治安は急速に回復していった。

一四一四年六月一日 Oldcastle に対する法律の保護はなくなったが、若干のかれの友人は国王の赦免を請願した。国王は近ずいた対仏戦にそなえて国内の安泰を図る必要から、もし Oldcastle が翌年四月一日までにかくれ家から出て国王に仕えるならば、その誤れる行為を許す旨を声明したが、Oldcastle はわなを恐れてこれに応答しなかった。<sup>⑩</sup>ウォルシンガムによれば、Oldcastle は国王がフランスに出征したという噂を聞き、実はまだ出征前であるにかかわらず、Malvern 付近に現われて旧怨をもっていた Abergavenny 卿と Richard Beauchamp に脅迫状を送っている。Beauchamp はウェスター州の所領から一隊の弓隊と武装兵五〇〇を集めて進撃した。Oldcastle は逃れたが、若干の同志が捕えられ、武器・軍資金・旗印などをかくしていた秘密の場所が露見した。<sup>⑪</sup>またかれもそれに関係していたと思われる陰謀、サウザムプトンで国王を暗殺する計画<sup>⑫</sup>が発覚してからは、Oldcastle は山中にかくれてしまっただらう。

このような状態であったので、貴族のなかには国王が出

征を中止するよう要請する者がいたが、国王はこれをおしきって八月一日に出征した。思うに、国内の治安には不十分なところは無いと判断したし、また対外出征によって国内の矛盾を転化することを当面の政策と考えたためであろう。事実一四一五年には、ロラードの徒はわずか二人 William Turnmyne と John Claydon がロンドンで逮捕され処刑されたにすぎず、教会の扉にはりがみがはられたり、パンフレットが配布されるような事件があったにすぎなかった。<sup>⑬</sup>

一四一六年夏には、「Oldcastle の使者」と呼ばれた Henry Greynder が国王に教会財産の没収を請願して投獄<sup>⑭</sup>されたたり、「偉大なロラード」と呼ばれた Benedict Woolman がリチャード王はなお生存していると主張した Thomas Trumpington を弁護し、ともに絞首刑に処されている。<sup>⑮</sup>一〇月八日には、さきにのべた William Par-chmyner が絞首刑になっている。一四一六年の暮には、Oldcastle の一味が Kenilworth でクリスマスを過していた国王を暗殺しようとしたといわれるが、それは実行されずじまいで詳細は不明である。<sup>⑯</sup>

一四一七年七月国王はふたたびフランスに出征したので、その留守中一〇月に Oidcastle はスコットランドの Albany 公を煽動して Berwick と Roxborough を占領させたが、まもなく Bedford 摂政によって撃退された。<sup>④</sup>これによっても、Oidcastle はリチャード二世がなおスコットランドに生存しているとして国王に対抗しようとしていたことが想定される。またかれ自身ウェルズ山中において Owen Glendower の子息と叛逆について打ち合わせをしたらしいが、かれの部下がスコットランドで逮捕されたことから十分な勢力をもちえず、この計画は実現しなかった。<sup>⑤</sup>その後まもなく St. Albans 僧院長は、Oidcastle が付近に潜伏しているという情報をえ、僧院の農奴の家でかれを発見し、夜襲を行なったが、わずかにかれの側近者の一人を逮捕し、若干の英語の本を発見したにすぎなかった。<sup>⑥</sup>Oidcastle はこの間に Welsh Marches に退き、恐らくは Welshpool の近くの Broniarth の淋しい地方に逃れたらしい。しかし、まもなくかれの動静は数マイル離れた Burghedin の領主 Sir Griffith Vaughan の耳に達し、かれは相当数の部下を派遣して遂に Oidcastle を傷けて逮捕した

のであった(一四一七年一月)。Oidcastle は重傷のままロンドンに連行され、二月二四日の議会において叛逆者異端者として審問された。ウォルシンガムによれば、なにか弁明することがあるかと聞かれた Oidcastle は、「リチャード王がなおスコットランドに生存している限り、自分を真に審問しうる者は、この出席者のなかには一人もない」といつた<sup>⑦</sup>という。もはやいへきことはなかつた。かれは思ひ出の St. Giles Field に連れ出され、絞首刑に処せられた後さらに焚刑に処せられた。伝えられるところによると、かれは最後に Sir Thomas Eppingham に対して、死後三日にして復活するから、ロラードの徒に信仰の自由を確保してほしいと頼んだといわれている。<sup>⑧</sup>

④ Cal. Inquis. post mortem IV 154 cit., "Oidcastle" by J. Tait in D. N. B. vol. xiv 1921 p. 980f. なお、かれはマナス人であるという主張 (Archaeologica Cambrensis 1st ser. i. 47; 4th ser. viii. 125 cit., Tait; Ibid.) があるが、これは信頼しがたい。恐らく国境付近に住んでいたことからウェルズ人の血統をうけていたと考えた方がよからう。

⑤ かれの伝記作者はシェクスピアの戯曲の影響をうけて、その死亡時を六〇歳ぐらゐの老人と考え、その生年を一三六〇年以前にする者 (e. g. T. Gaspey, Life and Times of Lord

- Cobham 1843 vol. 49 cit., *ibid*) が多いが、これは恐らく Bale ("Breve Chronicle" in *Harleian Miscellany*, vol. ii) がかれの後妻の祖父 John と混同し、一三九一・一三九五年の議会におけるローード運動の指導者としていたことによつたものであらう。シェクスピアもこれによつてその作のなかで白髪の大した道化騎士に描いたわけである。Oldcastle が John of Gaunt の城でウィタリノと会見したとか、一三九〇年のマッシュナイブリ令の通過に努力したとかいう Bale の想定は、これらも信頼しがたい。一三七八年説は、かれの同時代人 Elmham: *Liber metrics* p.p. 96, 166 によるものであるが、かれの長男は一三九四年生まれであるから、少くとも一三七六年のいとすくきじぶらう。(Waugh: *op. cit.* p. 436 n. 16 参照)
- ③ Robinson: *Castles of Herefordshire* p. 3 f. cit., Waugh: *ibid*.
- ④ Monmouth の北西隅に Oldcastle とらう村があり、これが Sir John Oldcastle の生地であるという説があるが、これは疑わしう。(Tait: *op. cit.*)
- ⑤ Rot. parl. i p. 179, 188
- ⑥ K. McFarlane: *John Wycliffe and the beginnings of English Nonconformity* 1952 p. 160.
- ⑦ Waugh: *op. cit.* p. 436.
- ⑧ Proceedings of the privy council. i p. 174, ii p. 68 cit., Tait: *ibid*.
- ⑨ Wylie: *Hist. of Henry IV 1384~98* vol. ii p. 5.

- ⑩ McFarlane: *op. cit.* p. 160, Waugh: *op. cit.* p. 437 n. 29
- ⑪ かれの第一の妻は一三九四年以前にかれと結婚し、男子が一人いた。第二の妻との間には、男子一人、娘三人がいた。Joan Cobham はその夫の死後まもなく祖父の John de la Pole を失ない、その全財産を孫娘として継承した。Joan は当時三〇歳ぐらゐであり、その財産の管理者として Oldcastle を選んだのである。けだし Oldcastle の上官であつた Codnor の Grey 卿が Hoo と Halstow のメナーをもつていたのを、恐らくこれを通じて Joan と親しくなつたのであらう。(Hasted: *H. of Kent* i. 559, 566 cit., Waugh: *op. cit.* p. 438 esp. n. 36 参照)
- ⑫ これが皇太子の知遇によるものであるか、かれの妻との結婚によるものであるかは議論のあるところである。Tait 教授は、ロンドンでは Cobham となつてゐるところから後者の説をとつてゐる (Tait: *op. cit.*) が、かれのあとには Cobham 家からは議会に出てゐないから、やはりかれの才幹が知遇をうけたことも考えられる。このことについては決定的な結論に到達するとは不可能であらう。(Waugh: *op. cit.* pp. 438~9)
- ⑬ Walsingham: *Hist. Angl.* ii 283 cit., Waugh: *op. cit.* p. 440 だけはロマー派の著名な一人 John Purvey の主張と一致するもので、すでに早くから主張されてきたものである。なおそのほか、世俗的職務において罪をおかした僧侶は、以後国王法廷または世俗法廷において裁判を受けるべきであるという要求および異端者焚刑令は苛酷にすぎるとして、その緩和を要求す

る請願もなされてゐる。

① Wylie; op. cit. vol. iii p. 309 cit., Waugh; op. cit. p. 440 n. 43.

② Rot. parl. iii p. 645 cit., Waugh; op. cit. p. 441 and n. 47.

③ これらの人物とその果たした役割については、拙論「ロバート運動の一考察」『西洋史学』第28輯を参照された。

④ Tait; op. cit.

⑤ Cargrave; De illutr. Hensrics; p. 121 and Walsingham; Hist. Angl. ii. 159 cit., Waugh; op. cit. p. 441

⑥ Wilkins; Concilia iii 329 f. 大司教 Arundel は Oldcastle の秘密をこの時に悟つたらしくが、皇太子の寵をえてゐるため地位が高いために面倒をおこす気はなかつたのである。

⑦ J. Gairdner; op. cit. vol. 1 p.p. 69~70

⑧ 山中謙二『モンチラン運動の研究』二四頁を参照。

⑨ Waugh; op. cit. p.p. 443~4 esp. n. 61.

⑩ J. H. Ramsay; Lancaster and York 1892 vol. 1. p. 174  
なおこの John Lay が果してやぎのやぎた John と同一人物であつたかどうか不明である。

⑪ Wilkins; iii. 352 cit., Gairdner; op. cit. vol. 1. pp. 72~3

⑫ この年七月二〇日に、国王は一四一一年のモンチラン遠征のときの戦利品に対する代価四〇〇ポンドを一四一四年 Michaelmas までに Oldcastle に支払ふ勅書を発してゐるから、この時までには少くともかれの転向に努力したらしい。なお、Tait;

op. cit. 参照。

⑬ Gairdner; op. cit. vol. 1. p. 74

⑭ 教皇庁は一四一三年一月会議を開き、ウィクトリフの書物を非難し、焼却すべきことを決議してゐたから、もちろん教皇への請願は無効であつたであろう。(山中謙二「前掲書一〇一頁」)

⑮ Collections of a London citizen. Camden Soc. 107 cit., Gairdner; op. cit. vol. p. 75. Waugh; op. cit. p.p. 450~1  
なお、塔内に送つても通常の罪人として扱つたのであると推測命令が欠如し、塔の番人 Sir Robert Morley への指令のみが残つてゐることからも想定されるであろう。

⑯ Fasciculi Fizaniorum (Roll Series) ed. by W. W. Shirley 1858 pp. 437~9

⑰ Fasc. Ziz. p. 440 Waugh; op. cit. p. 452

⑱ 同上 Fasc. Ziz. p. 443 f, Tait; op. cit. 参照。

⑲ Waugh; op. cit. pp. 455~6 and n.

⑳ Fasc. Ziz. に見出される Oldcastle の誓絶文書(p.p. 414~6) はかれの執筆したものと推定される。それは単なる下書きにすぎず、恐らくは Netter of Walden によつて記されたものであらう。それはやがてかれの逃亡によつて無用になつたのであるが、Walden の死後、Fasc. Ziz. のなかに編入されたものであると推定される。なお、Ramsay; op. cit. vol. 1 p. 178 n. 5. Waugh; op. cit. part I. note 参照。

㉑ Waugh; op. cit. part II. p. 627 f. esp. n. 1.

㉒ Waugh; op. cit. p. 638. esp. n. 5 and n. 6.

- ③⑥ McFarlane: op. cit. p. 166.  
 ③⑦ ibid. ③⑧ ibid. p. 167.  
 ③⑨ ibid.  
 ④① ロラード派はロンドン市内で有力であり、みずからの力を誇るブルカードをロンドン中の教会にはり、一〇万人が戦うの準備をこころを考えていたと云う。(Gairdner: op. cit. p. 74~5)  
 ④② 2442 f. 214 v. 44 Waugh: op. cit. p. 639 f. McFarlane: op. cit. p. 168 f. Gairdner: op. cit. p. p. 79~81 参照。  
 ④③ Waugh: op. cit. p. 643. n. 26.  
 ④④ Waugh: op. cit. p. 643. n. 31.  
 ④⑤ Waugh: op. cit. p. p. 651~2 and n. 64.  
 ④⑥ Waugh: op. cit. p. 652  
 ④⑦ 1444 一四一五年七月にをけるふゆの「サウサムブロン計画」の「シヤスヌムがその「クンリー五世」の第二幕第二場に描くところのふゆの。これは「マドモント伯爵 Richard ン財務官 Henry Lord Scrope of Masham をよむンサムンヤン州の Heton の Sir Thomas Grey によつて計画されたものであり、スコットランドから偽のリチャード王を連れてくるか、またはマーチ伯 Edmund をリチャード二世の正統な後継者として国王に推戴するという名分をかかげていた。ことに財務官 Scrope の裏切りはいかに王位が安泰でなかったかを示している。それとともにロラード派とくに Oldcastle がこの陰謀にうつらなっていたことは、一四一五年三月ロンドンの教会の

扉に今や復讐の時は近すられたと云うはりがみかしてあったことにはいふも恐ろしいと云ふべきである。この陰謀はマーチ伯が國王に背向したリヤンの陰謀と見いだす。(E. F. Jacob: Henry V and the Invasion of France 1947. pp. 55~7. Gairdner: op. cit. 1. p. 84 参照)

- ④⑧ E. F. Jacob: op. cit. pp. 109~24.  
 ④⑨ J. Gairdner: op. cit. vol. 1. p. 94.  
 ④⑩ Walsingham: ii. p. 317. cit., Gairdner: op. cit. 1. pp. 94~5.  
 ④⑪ Ramsay: op. cit. vol. 1. pp. 254~6.  
 ④⑫ H. G. Richardson: "John Oldcastle in the Hiding" in E. H. R. 1 v 1940. p. 437.  
 ④⑬ ibid.  
 ④⑭ Walsingham: ii. p. 328. cit., Waugh: op. cit. p. 656. Gairdner: op. cit. p. 97. "Harcian Miscellany" vol ii. p. 276~7. transl. and compiled by. W. G. Jones in Bell's Eng. History Source Book 1399~1485. Lond. 1914. p. 22.

II

当時のロラード運動は第二期の Political Phase の時期であり、ようやくオックスフォード大学を中心とする Academic Phase の第一期が終り、その神学的・教義的なものを失い、いわば民間の信仰運動ともいふべきものに

変質していた。<sup>①</sup>かれらは“men of the people”として民衆に接触して少からぬ感化を及ぼすとともに、一部貴族・騎士・<sup>ニクスクワイア</sup>郷紳の間にもその支持者をえていた。けだし、かれらの主張である教会財産没収の主張は、教会の特権や教皇権に対する反感をいだく人々には共鳴に価するものであったからである。とくにロンドンにおいては、かれらの活動は政治的傾向を帯び、有力なナイト層は一三九五年一月二七日議会にいわゆる「ロラードの十二カ条」を提案し、St. Paulの扉にそれをはり出して公然たる積極的活動を行った。この提案のなかには、あらゆる儀礼・虚飾の廃止・清貧の維持・僧侶の世俗職就任反対・結婚生活の肯定・戦争反対などがふくまれているが、その中心をなすのは、教会財産の没収であつた。<sup>②</sup>この形勢を重大視した教会側は、リチャード二世に要請して強力な弾圧を開始する。<sup>③</sup>一三九九年の政変の後即位したヘンリー四世は、その不当な篡奪のゆえにその地位がきわめて不安定であり、一層教会側との協力を必要とし、さらに弾圧に努めざるをえず、一四〇一年かの「異端者焚刑令」による強力な弾圧迫害体制<sup>④</sup>が樹立される。しかもなお、「ロラードの一二カ条」の第七条

は、ふたたびより具体的に一四一〇年四月二三日ウェストミンスターで開会中の議会に提案されている。それによれば「(教会財産を没収すれば)現在よりも一五人の伯、一五〇〇人のナイト、六二〇〇人の郷紳、一〇〇〇の施療院<sup>ホスピタル</sup>をふやすことができるうえに、国王は毎年二万ポンド以上の国防費をえることができる」というのである。思うに、このような具体的提案は、単に教会に対する反感 (Anti-clericalism) にもとづくばかりでなく、社会改革の方向を指向していたといわねばならない。支配階級はこのような提案を無視したのはもちろん、一層警戒を厳にし、弾圧を強化したのであつた。こうして議会を通じての闘争は、とうてい成功の見込みなく、ロラードの徒はしだいに叛逆的な方向に進むのである。<sup>⑤</sup>けだし、かれらは「……国王権や聖職者が繁榮している限り効果をあげえない」と考えたからである。Old castleの乱もこのようなロラード運動の段階と相応ずるものであつたことはいうまでもない。記録によれば、かれの叛乱の目的は、国王とその兄弟 (Clarence 公 Thomas および John & Humphrey of Lancaster) を殺害し、高僧・大貴族の権勢を奪い、自ら摂政となつて王国を支配し、教会・

修道院を廃止してその財産を没収し、これを公正に分配して新たな王国の秩序、「神の共和国」を実現するにあつた。それはまことに革命的な性格をもつものであつたといわればならぬ。

Oldcastle がいかにすばらしい騎士的性格の持主であつたかは、たとえば Hoccleve の詩にも、またさきにのべた審問記録にも明らかであろう。かれは激しい気性もち、重大な時には自己を制御できず、一度考えが固まると最後まで微動だもせず、一徹であり、敵手ですら「男らしい騎士」であつたことに意見が一致している。そしてこの騎士道精神において Oldcastle はヘンリー皇太子の心友たりえたのであり、国王がかれに信頼したのは、その戦士としての振舞ばかりでなく、かれの心情にあつたのであろう。それはヘンリー自身がかれのために尽した努力や友人たちのかれのために示した熱意にもうかがわれるところであり、この乱におけるかれに対する信頼こそ、この叛乱の重要な要因であつたことは否定しようべくもない。かれはローランドの徒として良心的に生き、神と王国につかえようとしたのであつて、「良心の防衛」のためにはその生命・財産を

投げだしてあえて悔いなかったのである。「シエクスピアも『Oldcastle は殉教者として死んだ』といい、かれは叛逆者ではあつたけれども、名誉ある称号をかれに對して惜しむものはほとんどいなかった」のである。このようなかれがなぜ信頼あつき国王に叛逆し、殺害を圖つたのであろうか。思うに、かれの心友たりし皇太子が一四一三年即位するや、教会側と握手して激しい弾圧と迫害をローランドの徒に加えたことはさきにみた如くである。かれにとつては、このような国王の態度は痛恨のきわみであり、かれは国王を今や侮蔑的に、King of Priests、とよんでいる。ウィクリフの教説に従えば、国王は聖者の教え・神の法則によつてその統治をなすべきであり、そうしない国王はとりかえることが正しいとも解釈されるのであつて、かれはヘンリー五世個人に叛逆したというよりは、むしろ誤つた国王にみきりをつけて立ち上つたのであろう。かれは善と信じたことは剣をもつて解決する騎士であつた。それこそ騎士の心情とすべきものであつた。かれは「神のために戦」おうとしたのであつた。かれとてもその計画が絶望的であることを知らなかつたわけではなからうが、しだいに弾圧と

迫害によってジリ貧になるよりは、騎士らしく武器をとって立ち上る心情に至ったのであろう。<sup>⑭</sup>かれは国王と教会側がロラードの徒を打倒することを決意せることを知るがゆえに、先手をうって立ち上ることは、まことに騎士の心情として当然であったと考えられる。しかも、一四一三年一二月開会のレスター議會では外国僧院廃止の請願が提起され、遂にその翌年にはこれが実施されたのであった。<sup>⑮</sup>これはもちろん当時の世俗的理由からする請願の成果であって、ロラードの徒の運動によるものとはいえないにしても、ロラードの徒にとっては自己の年来の主張実現の第一歩が印されたものと映じたであろう。追いつめられた Oldcastle にとっては、これこそ絶好の時機と判断されたのではなからうか。さらに、ブラーグにおけるフシーテンの運動は、一四一一年以来民衆の運動として発展し、Oldcastle が連絡を保つていた Huss・Waldstein を主導者としてはげしい抗議デモを行っていたし、一四一三年にはその勢力は大いに伸張し、バーメン各地にもえ拡がっていた。<sup>⑯</sup>このこともまた Oldcastle を強く刺戟したに相違なく。

さて、この乱に指導的な役割を果たした Sir Roger Acton

はもと職工の子であり、Welsh の戦争の功績によつて騎士にとりたてられたのであつて、ロラードの徒と目されていたが、絞首刑にだけ処せられた。サマセット州 White Leckington 出身の Sir Thomas Beauchamp のこときはロラードの徒ではなく、向うみずな冒険家であつたと認められる。<sup>⑰</sup>事実、この乱に参加した者のなかには、ロラードの徒以外の者も多かつたのであつて、処刑者のうち異端として焚刑に処せられた者は、150 以下であつたのである。<sup>⑱</sup>このことは叛徒のなかの相当数の者が何らかの慾望ないし金銭を目あてて参加したことを推定せしめる。「人々は Oldcastle との約束にひきつけられ、……王国のほとんどあらゆる地方から徒歩で指定の日時までには到着しようとするを急いでいた。なぜこのように急ぐのかと問うと、かれらは賃金をもらつて Lord Cabham のもとに参加するためだ」と答えた。<sup>⑲</sup>エセックスの John および Thomas Cook 兄弟は、乱に参加すれば一日 6d を支払うと Kalvedon の職工たちに約束し、またレスターシャーの Kidworth Harcourt では、この地方の牧師 Walter Gilbert が人々を 20<sup>0</sup>で雇用して乱に参加させているし、またロラードの

徒 Ederick なる者が Thulston の町で四人の男たち（かじ屋・織工・屋根工・石工）に 14 s 6 d を与えて参加させたという。<sup>⑧</sup> 著名なのは、Dunstable の富裕な醸造業者 Morley なる者の例であろう。かれが後に逮捕されてからの告白によれば、かれは Oldcastle から騎士に列せられ、ヒアフアド州の所領を与えられることを約束し、捕えられた時に一對の黄金の拍車と金色のかざりをつけた馬具をもっていた。<sup>⑨</sup> またレスターシャー Ilston の Thomas Noveray は必ず報酬をもらうことを期待して乱に参加する前に自分の全財産を売却したといわれる。<sup>⑩</sup> Oldcastle といえども一度立ち上る以上は成功を期したに違いない。それゆえにこそ St. Giles Field には可能な限りの人々を動員しようとしたと考えられるのであり、事実それは雑多な分子から成る鳥合の衆であった。<sup>⑪</sup> けだし、Oldcastle にとっては参加者が現状打破のために戦う意志さえあれば誰でもよかったに相違ない。また Oldcastle は全面的な殺戮を考えたのではなかつたであろう。何とならば、それはロラード派の教義自体に背き、国民の怒りをよぶものであったからである。かれはただこの国から僧侶の支配を除き、いわば「神の共

和国」を建設すれば、人々は争ってこれに参加するだろうと考えたのではなからうか。この意味においてそれはきわめてユートピア的なプランであったといわねばならない。また参加した人々も必ずしも血を流したり、掠奪をすることを目的としたのではなくて、現状を打破し弾圧をなくし、いわば平和な「千年王国」を夢みて各地から集まった人々であったろう。<sup>⑫</sup> このことはヘンリー国王が叛乱終結後もなく寛大な処置をとったことによってもネガティブに証しうるところである。もしもこの乱がロラードの徒による恐るべき陰謀であったならば、決してこのような態度にならなかったであろうことは、そのはげしい弾圧・迫害の方針に照して明らかであるからである。<sup>⑬</sup> したがって Oldcastle がはじめ一〇万人を動員できるとしたのは誇張であり、多くの年代記者がいうように二万人〜二万五千人が St. Giles Field に集合しつゝあったというのも正当とはいえないであろう。なるほど処刑者の出身州はミッドランド地方を中心とする十二州にまたがり、それぞれの州において若干の指導者または組織のようなものがあつたことは推定しうるところである。しかしながら、当時ロラードの徒として知

られていた人々のなかにも、たとえばかの William Taylor や Richard Wyche のように、直接この乱に参加していない者もいたし、<sup>⑭</sup> ロラードの徒のなかには Oldcastle の指令を知らず、また知つていても参加しなかつた者もいたことは否定できない。思うに、十二州にまたがっているといつても、叛徒の出身地はいずれも主要道路上に位置するのであつて、人々は巡回説教師または商人の伝達によりこのことを知り、それに参加しえたと考えられるのではなからうか。かくして、この叛乱に事実上動員できた人員はせいぜい数百人にすぎなかつたと考えざるをえないのである。<sup>⑮</sup> しかも、Oldcastle が最も期待したと思われるロンドン市民は、国王の速やかな措置によつて全く参加できなかったのであり、これがこの乱が小規模に終つた最大の原因であつた。<sup>⑯</sup> しかしながら数百といえどもそれは決して無力であつたのではなく、もし成功すればたちまちふくれ上る可能性があつたことは、当時の情勢から想像されるところであり、それが必ずしも無謀であり、成功の可能性がなかつたとはいえないであらう。要はそれが不意打ちであり、なによりも意表に出ることなくしては成功しなかつたことである。

さて、叛徒のうち最も多かつたのは、織工を中心とする織物の製造工程にたずさわる職人層（織物工・染物工・洗張工・仕立工など）であり、そのほかの職人・職工（鍛冶屋・大工・製靴工・靴下工・手袋工など）がこれについている。そのほか僧職にめぐまれぬ布教師、比較的余裕のある農民（ヨーマン）および一部の騎士<sup>騎士</sup>・地主・商人層がいた。<sup>⑰</sup> エセックス州では織工 John Cook が靴工・大工・刀工などの一隊の指揮をとり、この地方の叛徒の中核をなしていた。<sup>⑱</sup> 処刑された者のなかには「Thaxted の製靴工 John Smith・Woodstock の手袋工 William Brown がいたし、またプリストルを一月四日に出発して五日間で一二〇マイルを歩いて集合したプリストルの織工四〇名の参加は特筆に値しよう。要するに、叛徒の主力はミッドランド地方の主要道路に沿う町々の生産者層であつた。<sup>⑲</sup> 思うに、さきあげた十二州の地方は耕作地帯であり、典型的な荘園体制の発展した地域であり、したがつて領主権力は相対的に強大で搾取も激しかった。当時の領主経済の危機において領主的反動の強化により農民が都市に逃亡して職人・職工層になつた者も多かつた。また当時すでに「毛織物工業はこの国

の貧しい庶民たちの最大の生業」であったのであり、しかも閉屋制織元は領主とともに手を携えて小商品生産者層の上昇を抑圧しつつあった<sup>⑧</sup>。それゆえに、この地方の織工たちはとくに現状に不満であり、いち早く新たな考えと生きる道を見出そうとしたと想定されるのであって、Oldcastleの呼びかけに応じたものと考えられよう。なお Oldcastleの逃亡を援助したといわれる者がロンドン<sup>⑨</sup>の Smithfieldの羊皮紙製造工であったように、当時筆工・絵師などのなかにロラードの徒が多かったことも当時の特徴であった<sup>⑩</sup>。ただし、かれらはその仕事の間にロラードの教説になじんでいたからであろう。

次に、レスターシャー南東部 Kibworth Harcourt 地方の農民十二人が、同地方の牧師 Walter Gilbert によつて指導されたように、地方ごとに指揮者ないし指揮組織があり、叛乱の日時を知らせ、食品を貯え、宿舎をととのえて準備を行なっていたことに注意したい<sup>⑪</sup>。このことは当時の混乱した政情において地方権力の弱体化、州長や取締官の無力さを示すものであるが、同時にこの組織が余りにもいわゆる「Approvers」を集めることに努め、裏切り者を出

してかえって叛乱計画が露見するにいたった面を見逃すわけにはいかない。いわば、この乱はロラードの徒以外の分子を多くふくむことによつて失敗に帰したからである。ブリストールからの六人の布教師、Thaxted を中心に活動した教区僧 William Thurston の牧師 William Ederick もこのようなオルグであったろうし、ウースター州 Sutton の Sir Robert Acton・ケント州 Davington の Sir Thomas Talbot など騎士層<sup>騎士</sup>、ロベントリの毛織物商 Ralph Garton。前述した Dunstable の豪商 Robert Morley・Derby の三人の商人などの商人層、ヒヤフット州の John Brown・ロンドン<sup>⑫</sup>の Robert Harley・Richard Colfox・Colchester の John Bretenham・ノーヴァムチ州 Mildenhall の Edmund Frith・ノスター州 Ilston の Thomas Noveray。レスター州 Littleover の Henry Booth・ハッキンガム州の Cheyney 家などの地主層にも当面の組織者または有力なシンパとして活動した者であった<sup>⑬</sup>。思うに、この叛乱の第一眼目であり、ロラード派の主張の中核であった教会財産の世俗化は、現状に不満である騎士層<sup>騎士</sup>・富を求める商人層・地主層にとっては共鳴に価するものであり、議会に

おいても Anti-clericalism は強く動いていた。<sup>⑧</sup> かれらが教会財産に対して激しい不満と敵意を抱いていたことは、議会における請願がしばしばなされたことによっても明らかである。かれらの大部分は Oldcastle の計画とは無関係に動いていたのである。けだし、かれらには、ロラードの徒の教義的内容や活動には理解をもちえなかつたからである。ただわずかに主要道路に沿う地帯においてロラード派のオルグが働きかけた場合、それに参加して現状打破を望む者が若干あらわれたことは不思議ではない。とくにその際 Oldcastle の魅力は強くかれらに訴えたに違いない。

しかしながら、一般には何故に武器をとって立ち上らねばならないか、とくに国王とその兄弟を殺害する計画については理解できなかったことであろう。すでに、一四〇六年ごろからロラードの徒のなかには、リチャード二世がなおスコットランドに生存しているという噂を広めるものがあったが、それはランカスター政権の迫権に対処するためであつたらう。<sup>⑨</sup> Oldcastle 自身リチャード二世が生存していると主張したといわれているが、それはやはり広範な勢力をえようとする策であつたと見るべきであろう。ヘンリー

五世の地位の弱点はまさにここにあり、このことを説くことよつてその勢力を拡大し、国王殺害の根拠を正当化し、その究極の目標たる「神の共和国」の実現を期したのではなからうか。<sup>⑩</sup> それにもかかわらず、かれらはこの線を積極的に押し進め、ヘンリー五世を除くためにプランタジネット派や Mortimer や Owen Glendower と合流しようとはしなかつた。<sup>⑪</sup> このことは、なおこの乱が依然としてロラードの徒を中核とするものであり、決して内乱的・政争的なものでなかつたことを示しているといわねばならない。とくに国王とその兄弟の殺害をかけたこの叛乱は、とうてい広範な階層の支持をえることはできなかった。何とならば、すでに一三八一年の叛乱や後の一四五〇年の乱が示しているように、いわば「君側の奸」を除き、神の命によつて善政を行う国王とその下における忠良なる臣民よりなる国家(絶対主義的体制)を樹立することが当面の方向であつたからである。それゆえに、裏切りと密告によつてこの乱は失敗に帰したのであり、ふたたびロラード派は騎士<sup>ナイト</sup>・地主・商人層の支持はえられず、また Oldcastle のごとき有力な指導者をもちえず、おもに民衆に訴えるほかなかつた

のである。そして、このことを最も明瞭に示すものは、一四三一年春 Abington の一職工 William Perkins によつてなされた、いわゆる「Jack Sharpe の乱」である。これは Oldcastle の乱の後継とみなされたものであるが、それは職工を中心とするより急進的な運動であり、「財産の共有」をかかげて一層ユートピア的であつたし、また有力な騎士・地主・商人層は全く参加していなかつた。かれらは教会財産没収を叫び、税の減免を要求して民衆に訴へたにすぎず、直ちに弾圧されてしまうのである。こうして、ロラード運動は、そのいわゆる第三期「地下運動」の時期に入るのであり、もはや政治的には有力なものとはなりえなかつた。そしてそれゆゑにこそ、後にイギリス宗教改革が日程に上つたときに、かれらロラードの徒は民衆の間にその教義を保つていたにすぎず、ウィクリフ以来の教義的な改革への道は十分に開花しなかつたのである。イギリス宗教改革はなによりもより有力なジェントリー層・商人層の支持によつてヘンリー八世の絶対主義的政治体制樹立の方向において成立するのである。

① 前掲拙論「ロラード運動の一考察」参照。V. H. H. Green:

The Later Plantagenets, Lond., 1955 pp. 201~9.

② H. S. Cronin: "12 Conclusions of the Lollards" in E. H. R. 1907 pp. 292~304. マーケットの十二カ条は編集されたものであり、その原文は三十七カ条から成つてゐた。(E. H. R. xxvi pp. 738~49 参照。H. B. Workman; John Wyclif 1926 vol. ii 391 ff. E. H. R. Oct. 1911 pp. 738~749 以下)

③ J. H. Dahnus: "Richard II and the Church" in Catholic Hist. Rev. 1954, p. 410.

④ T. Davis; Documents illustrating the Hist. of Civilization in Medieval England 1926 pp. 262~7.

⑤ これはウィクリフの直弟子である Purvey のプランであり、後の一四三一年 Jack Sharpe によつてはらまれたメンブレットにも見られ、シエクスピアの「ヘンリー五世」第一幕第一場にもみえてゐる有名なものである。伯が年間三〇〇〇マーク、ナイトが一〇〇〇マーク、卿紳が四〇〇マーク、施療院が一〇〇マークを費消するとすれば、年間四五三〇〇マークを要するが、司教・僧院長・副院長の世俗財産は年間三三二〇〇マーク評価され、さらに一〇〇〇〇マークが世俗職の僧院によって費消されているし、一五〇〇〇人の僧侶が三マークをえているから、これらを節すれば優にまかないうるというのである。Walsingham ii 282 によれば、司教・僧院長・副院長の世俗財産の没収は年間三四二〇〇〇マークの誤りであるという。Sharpe のメンブレットは各伯から一〇〇〇マークを減じ、卿紳から二〇〇マークを減じて収支合計三三二〇〇〇マークとし

- じらる。Kingsford によれば、<sup>オールドキャッセル</sup>騎士は「<sup>オールドキャッセル</sup>騎士」ではなく「<sup>オールドキャッセル</sup>騎士」  
 である。Workman; op. cit. vol. ii pp. 398~9. App. Z.  
 pp. 420~1 Summers; op. cit. p. 48. 本誌①②参照)
- ② 同上の「<sup>オールドキャッセル</sup>騎士」を参照。
- ③ M. E. Ashton; "Lollardy and Sedition 1381~1431" in  
 Past and Present No. 17, Apr. 1960 p. 28.
- ④ Roll of Parl. IV 107~10 cit., Ashton; op. cit. p. 19~20.  
 Gairdner; op. cit. I. p. 82. Waugh; op. cit. pp. 648~9.
- ⑤ Gairdner; op. cit. I. pp. 85~7.
- ⑥ Waugh; op. cit. p. 657 f.
- ⑦ Gairdner; op. cit. vol. I. p. 83.
- ⑧ G. M. Trevelyan; England in the age of Wycliffe 1929  
 ed. p. 337.
- ⑨ Trevelyan; ibid. p. 338.
- ⑩ Gairdner; op. cit. I. p. 86.
- ⑪ 拙稿「<sup>オールドキャッセル</sup>の史的地位について」『キリスト教史学』  
 第7輯参照。
- ⑫ Ramsay; op. cit. vol. I. p. 254.
- ⑬ Rot. Parl. IV 13~15. cit., Morgan; op. cit. p. 209.
- ⑭ 百年戦争に際してマランヌへの送金は敵国をうるおすことと  
 あり、かつスナイ行為を通信してゐるといふ疑いからなされた  
 ものであるが、事実上は百年戦争の資金調達策であつたことに  
 注意した。 (D. D. Knowles; The Religious Orders in  
 England. 1955. vol. ii. p. 161 f.)
- ⑮ このことは同じマクスター議会がローリーの徒に対してつた  
 "Merciless Statute" によつてなされた弾圧政策をよつたことと  
 同様に明らかである。(W. H. Summers; The Lollards  
 of the Chiltern Hills 1906. p. 57)
- ⑯ 同上の「<sup>オールドキャッセル</sup>騎士」を参照。
- ⑰ Chronicon Adae de Usk ed. E. M. Thompson 1904. p.  
 121. cit., V. H. H. Green; Reginald Peacock 1945 pp. 99  
 n. 1.
- ⑱ McFarlane; op. cit. p. 170. Waugh; op. cit. p. 649.
- ⑲ McFarlane; ibid. p. 177. Waugh; op. cit. p. 650 n. 61.
- ⑳ K. H. Vickers; England in the Later Middle Ages 1930  
 p. 345.
- ㉑ Walsingham ii. 298 cit., Gairdner; op. cit. vol. I. p. 80.
- ㉒ 同上 McFarlane; op. cit. pp. 173~5.
- ㉓ Gairdner; I. p. 83. Waugh; p. 649. McFarlane; pp. 170,  
 177.
- ㉔ Ashton; op. cit. p. 20.
- ㉕ Waugh; op. cit. p. 650.
- ㉖ Waugh; op. cit. p. 451.
- ㉗ オックスフォードのローリーの徒から Arundel によつた手  
 紙によれば、イギリスには全部で一〇〇、二〇〇人のローリーの  
 徒が居り、そのうち七〇人は騎士で、二〇〇人は<sup>オールドキャッセル</sup>騎士であり、  
 五〇〇人は僧侶であると自負してゐた。(Snappce; 130~2. cit.,



Adam of Usk はロラード派が「110 税や教会寄進を廃し、教会の世俗財産を没収することを主張して有力な者や富める者に喜びを与え、この国に多くの災厄・陰謀・紛争・私闘・内乱の種子をまいているが、それは恐らく王国の破滅まで続くであろう」<sup>①</sup>。そして「いつその頭上に衰亡と破滅が来るかわからない状態になっている」となげいている。

また、一四一七年夏 (なお Oldcastle が逃亡中) Margery Kempe がロラードのところが告発された時、人々は「かの女は Lord Cobham の娘で、国中にそのメッセージをバラまくためにきたのだ」<sup>②</sup>と考えた。また同年森林・公園・獵場などで起った暴力的事件についても、「犯人はおそらくロラードの徒であるか、またはかれらによつて煽動されたものである」<sup>③</sup>と人々は指摘した。Ashton はこれらの諸例をあげて、「しだいにロラードの徒は叛徒であるという議論が樹立されていった。そして一度樹立された見解は、それ自体歴史的事実であり、歴史に現実に働きかけたのである」<sup>④</sup>と主張している。

すでにみたように、ロラードの徒による提案は、きわめて具体的に教会財産没収案を示し、当面の財政方策を述べ

てすぐれて政治的であつたが、それはその意図を越えていわば両刃の剣とならざるをえなかつた。教会財産の没収は世俗領主財産の没収に、110 税の廃止は領主の封建地代の廃止といういづれも現実の社会秩序の変革に通ずるものと考えられる可能性を内包していた。それは支配者層にとつては、まことに恐るべき方向であり、ロラードの徒に対する警戒の目をゆるめることはできなかつたのである。ロラードの徒は、「すべての法や権威に対する尊重を破壊する傾向を示し、王国の秩序をほりくずすもの」<sup>⑤</sup>と見なされることを避けることはできなかつた。もちろんこの提案それ自体は、かれらの教義・教説の具体的展開であつたのであるが、それ自身当時にあつては政治的な影響をもたらしたこともまた否めない事実であろう。

しかしながら、当時の史料は、ほとんど支配者の記録したものであり、いづれもロラードの徒に敵意をもつものであつたことに留意しなければならない。また、当時は議論に風味をそえるために誇張がなされるのが慣行であり、当時の史料には相当の誇張があることにも注意すべきである。思うに、当時のロラードの徒は弾圧・迫害下にあり、その

教説は必ずしも統一されていたとはいえないけれども、ローラードの徒の一般の信条はさきあげた「ローラードの十二カ条」の第一〇条に明示されているように平和主義であり、

「剣をもつて立ち向うものは、剣をもつて亡ぶべし」というにあつた<sup>⑥</sup>。事實はげしい弾圧・迫害に対しても、ローラードの徒は受動的抵抗という姿勢をとっていたのであつて、ここにローラード運動が基本的には宗教的なものであつた所が存したのである。すでにみたように、Oldcastle の乱の中核それ自体はローラードの徒であつた。とくにそれが「神の共和国」を建設するという、ユートピア的なものをもつていたことは、このことを明証しているといつてよからう。しかしながら、さきにのべたように、この乱には多くの異分子・冒険家や金品・慾望のために動いた者がふくまれていた。事実ローラードの徒のなかには、平和主義を守つて敢えてこの乱に参加しなかつた者もいたのである。国王殺害の企図は Oldcastle の心情としてはやむをえないものがあつたとしても、ローラードの徒の全面的賛同はえられなかつたのである。あたかもこの乱の前後に実施された外国僧院没収に具体化した世俗的 Anti-clericalism を背景

に、またボヘミアにおけるフシーテン運動の発展に刺戟されて<sup>⑦</sup>、この乱はこれまでのローラード運動とは異なつた方向、すなわち叛乱の要因を露呈したのである。

それゆえに、Ashton の主張は Oldcastle の乱のみに該当するのであつて、ローラード運動それ自体が叛乱的な性格をも速ていたとはなしえないであらう。Oldcastle が三カ年間以上逮捕されなかつたのは、かれがローラードの徒の組織のなかにいたからであり、この乱が失敗に帰した基本的な原因は、それが多くの異分子をふくむことによつて、その計画が国王側に洩れたからであつた。

このようにみるのが妥当であるとすれば、一五〇年にわたるローラード運動<sup>⑧</sup>のなかにあつて、この乱は世俗的 Anti-clericalism との結節を示すものであり、異端運動というわくを越えた政治的叛乱の面をもつたものと規定できよう。ここに一般にローラード運動が叛乱的性格をもつものであるという印象が刻印され、そのことが絶対主義へと傾斜しつゝあつた当時のこの国においては、かえつてこの運動を弱体化し、ウィクリフ以来の教義的改革への途は、十分に開花しえなかつた所以がある。イギリス宗教改革がさして教

義を変更することなく、ただその首長が教皇から国王に変わるという特異な姿相をもつたにすぎたのも、一つにはこのような経緯によつて理解すべきなのもある。

- ① Adam of Usk: "Chronicon" ed. by E. M. Thompson 1904, pp. 3~4, cit., Ashton; op. cit. p. 6.  
② "The Book of Margery Kempe" ed. by S. M. Meech and H.E. Allen. E. E. T. S. p. 6, cit., Ashton; *Ibid.*

- ③ Rot., Parl. IV, pp. 113~4, cit., Ashton; *Ibid.*  
④ Ashton; *Ibid.* p. 5.  
⑤ Rogeri Dymonk Liber. pp. 89~92, cit., Ashton; *Ibid.* p. 11.  
⑥ Cronin; op. cit. pp. 302~3.  
⑦ E. F. Jacob: Henry Chichele and the ecclesiastical politics of his age 1952, p. 16.  
⑧ 徳興無鑑「ルネッサンス時代の「宗教」参照」

part in order to make reactionism one of the current ideas of the times, having a nationwide organization as an eliminating organization of *Pa-Ku-Wên* 八股文 with a slogan of revival of ancient studies, and had a great political influence equal to the *Nei-Kuan* 內官 faction, supported by its nationwide organization; at the end of *Ch'ung-chên* 崇禎 it temporarily realized its political idea with some compromise by forming the cabinet of *Tung-lin* faction.

This means a political movement of comparatively civilized landlords in the advanced area of *Chiang-nan* 江南 standing against the rotten administration of the *Nei-Kuan* 內官 faction to pass through the then crisis ..... a national crisis of inside development of agrarian disturbance and of outside invasion in *Manchuria* 滿洲. In the history of politics and ideas in the late *Ming* and early *Ch'ing* 清 *Fu-shê* has a very great importance.

## Oldcastle's Rebellion and its Significance

by

Michikazu Matsuura

Oldcastle is well-known as Falstaff in Shakespeare's "Henry IV." To begin with, tracing his stormy career, we tried to explain why he raised the rebellion. Though the so-called "Oldcastle's Rebellion" has in it many complicated phases, such as Oldcastle's personal fascinations, the participation in the rebellion of the outsiders, the utopian concept of "God's commonwealth" to be realized, and the organization for delivering the notice of the project, it was still fundamentally a kind of a heretical movement. And yet it could not help carrying some political and riotous aspects with it, involving knights, gentries, merchants and artisans (especially weavers), who wanted to do away with the status quo, themselves being spurred by the Hussiten movement in Bohemia and by the influence of anti-clericalism as was seen in the confiscation of the alien priories.

On account of these aspects of the rebellion, the Lollard move-

ment, giving a strong impression that it had a riotous character, came to get no more support of the influential, and it turned into an underground movement. And herein we can find one of the reasons why the continued course of the doctrinal reform since Wyclif was held up as early as then in England.

## The Emigrant Labour and the Tenant Farmer

—with special reference to *Kubiki* plain *Niigata*  
prefecture 新潟県頸城地方—

by

Yûichi Takazawa

This article concretely explains the existence of emigrant labor and its combination with tenant farming in the late Shogunate and early *Meiji* 明治 periods, as a materical of the *Kubiki* 頸城 plain in *Niigata* 新潟.

This *Kubiki* plain is a single-crop area of rice having no important industry and long winter covered with a heavy snowfall, where the parasitic landlord system was formed and emigrant labor was also early generalized under the strict regulation of lords about the early nineteenth century.

This emigrant labor was brought only from tenant farming; a tenant farmer not only operated his small farm but carried out decrease of living subsistence and increase of monetary income by discharging surplus labor power such as the second and the third sons to the *Kantô* 関東 area and others as an emigrant.

Emigrant labor, under the special conditions of ringle-crop of rice, small scale of farming, and payment of rent in kind, is that special labor form except farming which is inseparably related to farming.